



「世界海の百科図鑑
—生態系・環境から
地形・資源・保全まで」

ジョン・パーネット 著
川口弘一, 平 啓介 監訳
東洋書林, 2004年8月, 207頁
定価18,000円 (本体価格)
ISBN : 4887216092

私事で恐縮だが、時間を見つけて趣味としてダイビングを楽しんでいる。そこで見ることの出来る魚たちの数の多さ、種類の多さには、いつも驚かされる。様々な形、様々な色の魚たちを見ていると、人間の想像力は自然の造形の足下にも及ばないと思う。しかし一般にダイビングで潜るのは水深20mから30m程度で、海洋全体から見るとほんの表層部分でしかない。身近な存在である海というものの奥深さに圧倒される。

気象学にとって、海は水蒸気の供給源であり、巨大な熱源であり、熱輸送機関でもある。本書はそのような物理的な側面からだけでなく、社会学の側面から、そして生物学の側面からと、海についての知識を幅広く記述している。

全ページフルカラーで、貴重な写真の数々や、初めて見る図・地図に圧倒される。見開き2ページで1つ の話題を扱い、美しい写真や図でいねいに解説されている。数式は使われていないので、中学生や高校生にも理解できる。高価な本であるので、学校の図書館などで利用できればと思う。

章ごとに内容を紹介する。

『第1章 海洋』海洋の物理的・化学的な性質について。水の循環、海流、低気圧とハリケーン、海洋の熱塩循環など、気象学に関連することも紹介されている。ハリケーンの構造と、水の循環については、イラストで紹介されている。浸食される海岸で見られる、壮大な岩のアーチや、同じく浸食により失われた砂浜の写真が印象的。

『第2章 海洋開発』古代から現代にかけて、人間がどのような方法で海洋を開発してきたかについて。航海術の発展と潜水法の歴史について。初期の先駆者たちが原始的な海図と道具だけを頼りに、まさに命がけて冒険の旅をしていたことを思い起こさせる。現代の海洋観測で、流速計と採水器を使用する様子が紹介されている。潜水法の歴史では、アクアラングが登場

するまで、ホースで海面から空気を送っていた時代が100年以上もあったことが意外であった。

『第3章 海洋生物』プランクトンからクジラまでの、様々な海洋で暮らす生物たち。巨大なクジラから、深海に棲む小さな魚まで、写真と図で紹介されている。どう猛な鯨の牙をアップで捉えた写真にぎょっとさせられる。

『第4章 海洋資源』海の資源は漁業資源だけでなく、鉱物資源、海洋発電などが挙げられる。19世紀からの乱獲で、漁業資源が世界的に打撃を受けている現状を紹介し、資源管理の必要性を説いている。また、人間の都合による問題である排他的経済水域についてや、海の利用を巡る摩擦についても述べられていて、自然科学系の事典としては珍しいことだと思う。海洋汚染の項目で紹介されている廃棄物を違法に投棄している場面が衝撃的。

『第5章 世界の海洋』世界各地の海洋の各種資源、地理的な特徴などを紹介している。見たことのない地域の写真や詳細な地形図が興味深い。太平洋におけるエルニーニョ、南極のオゾンホールについての解説もある。第4章で述べられた漁業資源の乱獲問題が再び取り上げられ、この本の中の主要なテーマとなっている。

『第6章 海洋生物学百科・数値で見る海洋』モノクロページで、動物界と植物界の概観が述べられている。「数値で見る海洋」では、主に漁業資源から見た統計が示されている。

編者はジョン・パーネットという人で、国連環境計画の環境基金の責任者で、生物学・環境学の専門家だという。太平洋地域の途上国で、20年以上にわたって生物学・環境学の教育研究に寄与し、ユネスコ政府間海洋学委員会でも専門家として勤務した経験を持つ。そのためか、太平洋についての記述も豊富で、日本の読者にも親しみやすい内容となっている。共同執筆者は英米の海洋研究者40人から成っている。

日本語訳に当たっては、生物分野を川口弘一氏（東京大学海洋研究所名誉教授・海洋生物学）、非生物分野を平 啓介氏（琉球大学監事、東京大学名誉教授・海洋物理学）が担当されている。本書は1977年、イギリスで初版が出版された。日本語版は1994年の改訂版を元にしており、時間がたっているため、その後の変化について訳者が加筆した部分がある。索引も充実していて、事典としても優れている。

(気象庁予報部予報課 永山隆治)